

茶の湯と銅器

大阪大学・名誉教授 古城紀雄



真台子荘

よつて実家自体も焼け落ちてしまった。

事情あつてその母方の祖母が時期私達の家に身を寄せることとなり、共稼ぎの教師であつた両親に代わつて、私達兄弟が学校から帰ると「おかえり」といつて迎え何かにつけて面倒をみてくれた時期があつた。それは私の小学生高学年時代の三年ほどであり、その時期であつたと思うが、この茶道師範の祖母から抹茶を点ててもらつたかすかな記憶がある。

後年になつて偶然抹茶をいただいた時、同席した抹茶初体験の友人達と異なり、言いようのない懐かしさを覚えるとともに突如としてその祖母がその場に蘇つて来たように驚いた記憶がある。まさに無意識のうちに抹茶をいただく状況雰囲気、凛とした和服姿の祖母と直結していたのである。

後年、大阪に住まいするようになり、そんな祖母が生きた世界に浸つてみたいと京都の家元での茶道の修養・稽古の場に入れていただいた。それは二十六歳の時のことであり爾来四十年余の年月、仕事との折り合いに苦勞しながらほそほそではあるが、茶道の研鑽という機会を持ち続けてきた。仕事の上では常勤という立場をこの三月で卒業することになったが、茶道に接して学んだものの方や知識は本業が行き詰まった折々に私を勇気づけ、また、適切な解決策を生み出してきたという感じさえ今は持つている。

コーヒーと同様に気楽にいただく抹茶はともかく、「茶の湯」となると全く異次元の世界となる。茶会では亭主は客のために日頃の稽古研鑽に磨きをかけつつ、先ずその茶会のテーマを決める。なかでも床飾りは重要でその中心となる軸、その軸とテーマにふさわしい花生と花について考え抜き、それが決まると、適切な棚、茶碗、茶入れ、茶杓、水指などの点前廻りの道具の取り合わせに腐心する。露地の準備、懐石料理の内容についても配慮し、手伝い方の配置を考える。このプロセスは庭木から

書、茶道具（銅器、陶器、木工竹製品など）、建築、茶、菓子など日本文化全般にわたる造詣をもとに進められ、また、客となる方々の嗜好・性格にも配慮することも求められる。そして、決してあからさまではない形で、設定されたテーマが道具を含めたすべてのしつらいの基礎的つながりを形成するように決められるという。まさに、精神的なものも含めて、「日本文化の凝縮」としての位置付けが茶の湯に与えられている所以である。

ところで、茶の湯のスタイルを「真行草」と分類することがある。この「真行草」とは、本来書道における書体の違いを示すものであるが、日本文化について「美」のとらえかたの表現としても用いられる。茶の湯では東山文化に端を発する書院茶を「真」とし、晴れの儀礼ではその形式に従う。すなわち足利義政に代表される高貴な武人や神仏に茶を奉る際に用いた「台子」やそれに伴う「皆具」なども、書院の茶という本来の形という意味で真の形とされている。現在いくつかの神社でおこなわれている「献茶」の際の道具立てはまさに「真」の形である。ちなみに、書院茶から独特の茶の形を作り上げた村田珠光らを「行」とし、「真」と対比する確固たる理念へと発展させた千利休が「草」と言われているようである。

献茶の儀で実際に点前をされる（献ずる濃茶や薄茶を点てる）のは「宗家」の家元または若宗匠である。数少ない経験ではあるが、献茶の儀を間近で拝見する機会をもったことがある。台子並びにそれに組み込まれた風炉釜とともに、皆具としての一連の道具（水指、杓立、蓋置、そして傍らに置かれる建水も含めて）が醸し出す雰囲気は茶を献ずる相手への徹底した尊厳への配慮の組み合わせであつた。この中でゆったりとした大振りの点前がいやが上にもその厳粛さを極度に実感させる。

母の実家は浄土真宗本願寺派の寺で、古儀茶道數内流の師範の家柄であつた。のちのちわかつたことだが、代々茶道師範を務めるかたわら、流儀で使う利休棗（まぼ）の原型を保持して京都の塗師に見本を提供していたようである。このことは高橋箒庵著の「大正茶道記」に記載されている。しかし、残念ながら第二次世界大戦をはさんだ戦中戦後の混乱の中でこの実家は寺を廃業し所蔵していた茶道具類も散逸し、何よりも富山大空襲に

ここで、真の茶道具としての青銅器に言及しなければならぬ。書院の茶の形や献茶、そしてこれら真の形を標榜した茶席では高い頻度で「青銅」製の茶道具が用いられることが多い。「台子」を用いたり、台子の天板を下したと見立てる「長板」の上で諸荘りにしつらえる場合、唐銅風炉に鉄鑄物製の釜が掛かり、抱桶形モール水指、そして唐銅の杓立には飾り火箸と柄杓が入り、三つ人形や穂屋などの形の青銅製蓋置が連なる。また、建水には銅と錫の合金である佐波理(響銅、砂張とも書く)も用いられる。これらは現在で言う青銅を基本としているものの、色調や伝来の経路及び模様などによって多様に呼ばれているようである。特に唐銅(からかね)は青銅の古称で、材料は銅と錫の合金が大半であり、それ以外に鉛、ニッケル、亜鉛などを含んでいる。現在の一般的な配合は、銅に錫を五—一〇%、亜鉛を〇—四%であるという。



燕庵名物 金紫銅卮透かし鼎香炉



唐物胡銅象耳花生

また胡銅、もしくは古銅という場合がある。この場合は主として中国から伝来の古代の銅器、またそれを写した宋元代の銅器を言うようである。(この度藪内ご宗家よりお借りした「真台子荘」の写真では、卮字風炉釜(風炉が唐銅)、モール抱桶水指(黄銅打ち出し)、唐銅穂屋香炉蓋置、藪内好みの茶の実頭の飾り火箸(黄銅)、古銅桃尻形の杓立が組み込まれている。)

このような台子まわりの真の茶道具としての銅器のみならず、何よりも床にあつて花とともにその茶会のテーマを補完する「花生」も真の形では胡銅である場合が多い(写真)。また、床に花生を置かず「香炉飾り」にする場合の香炉もほとんど銅器である(写真)。ここに示す香炉は藪内家に伝来する燕庵名物に含まれ、藪内家の遠祖が義政より拝領した貴重な逸品である。他にも、露地の客に茶席が整ったことを亭主が知らせ打つ「銅鑼」(写真)も佐波理である。加えて、炭点前の際の灰匙などの小道具も含めて東山時代からの茶の湯には多種多様の銅器が用いられてきている。

実に足利義政時代に書院茶の濫觴(らんさう)を見る「茶の湯」の草創期、それが銅器なくして成立・発展しなかったことを深く想うことである。足利義政から藪内劍仲に伝来し、それをめぐって千利休との交流で「姫瓜」との銘を持ち、その時代からでも約五五〇年を経てなお茶の湯とともに現代に輝きをみせる「胡銅象耳花生」と親しく対座できた折の感動は今も鮮やかである。写真は同様な「胡銅象耳花生」で神秘的な風合いと気品を感じさせている。

教育・研究分野だけでなく、そんな銅合金の茶道具との付き合い・出合いはまだまだ続きそうである。(本稿には、藪内ご宗家のお許しを得て、同家に伝来する貴重な茶道具に関する写真を掲載させていただきました。藪内紹由若宗匠はじめご宗家の方々に、記して深く感謝申し上げます。)



大阪大学・名誉教授 **古城紀雄**

1944年生れ。富山大学工学部卒、大阪大学大学院修士課程修了後直ちに同大学工学部助手となり、平成6年より留学生センター教授及び大学院工学研究科マテリアル生産科学専攻担当教授。現在大阪大学名誉教授並びに客員教授。大学院講義「超塑性材料工学特論」は現在も担当。大阪大学留学生センター長、国立大学留学生指導協議会代表幹事、専門日本語教育学会会長、超塑性国際会議諮問委員会事務局長、一般社団法人軽金属学会関西支部長などを歴任。現在「日本銅学会」副会長兼企画運営委員長、公益財団法人藪内燕庵評議員、国際ロータリー2660地区・地区米山委員会委員他。



南蛮銅鑼